

【表現学関連分野の研究動向】

英語学

杉浦 秀行

2022年に出版された書籍の中で、最も特筆すべきものは、堀内ふみ野氏による『*English Prepositions in Usage Contexts: A Proposal for a Construction-Based Semantics*』（ひつじ書房）である。本書は、認知言語学を基本的な枠組みとし、なかでも、使用基盤モデルに依拠し、英語の前置詞について、コーパスデータを駆使しながら具体的な用例に基づいた分析・考察を行っている。従来の認知言語学の研究では、研究者の作例に基づき、イメージスキーマの変形や比喩的拡張を通じて前置詞単体の意味の多義性を記述していたのに対して、本書の使用基盤アプローチでは、複数のコーパス・データに基づき、構文的観点から前置詞の意味を捉え直すことを試みている。本書の独自性は、前置詞はそれ単体で意味が構成されるのではなく、具体的な言語使用コンテキストの中に埋め込まれ、その前後に共起する語と構文（コロケーションやイディオム、定型表現を含む）を形作ること、言わば構文の意味を構成しているという点である。

次に注目すべき書籍として、廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・長野明子編著『比較・対照言語研究の新たな展開—三層モデルによる広がりと深まり』（開拓社）を挙げたい。本書は2017年に出版された『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』（開拓社）の続編にあたる論文集である。三層モデルは、話し手を「思考・意識の主体としての私的自己」と「伝達・報告としての公的自己」に分け、言語使用を私的自己による状況把握や解釈を担う「状況把握」の層、状況把握した内容を公的自己によって聞き手に伝達する「状況報告」の層、そして公的自己による聞き手との対人調節をする「対人関係」の層という三層からなるという。これらの層の設定からわかるように、三層モデルは認知言語学と社会言語学・語用論を統合するモデルとして提案されている。本書は10篇の論文を掲載しているが、最初の3篇は日英語対照研究となっており、他者の言葉を相手に伝える主観の客体化問題、話法と時制、言いさし文について分析・考察が展開されている。

もう1つは、廣瀬浩三・松尾文子・西川真由美著『英語談話標識の姿』（ひつじ書房）を挙げたい。タイトルこそ専門家向けに書かれたように見えるが、本書は『ちょっとまじめに英語を学ぶシリーズ』の第5編で、一般の英語学習者向けに執筆された書籍である。「認知的」を「情動的」と言い換えたり、「相互作用的」を「対人関係的」と平易に置き換えて提示しつつも、専門家ならではの視点から、様々な談話標識の機能を詳らかにしている。具体的な用例は映画の台本や小説などが多く、一般の読者には身近に感じられ、学習意欲を高めることが期待できる。また、最終章では、Brown & Levinson (1978/1987) のポライトネス理論に踏み込んで、専門的な観点から談話標識の役割を解説しているが、極めて明快かつ行き届いた解説となっており、ここまで本書を読み進めた読者であれば、知的好奇心をくすぐられるはずである。（同志社大学）